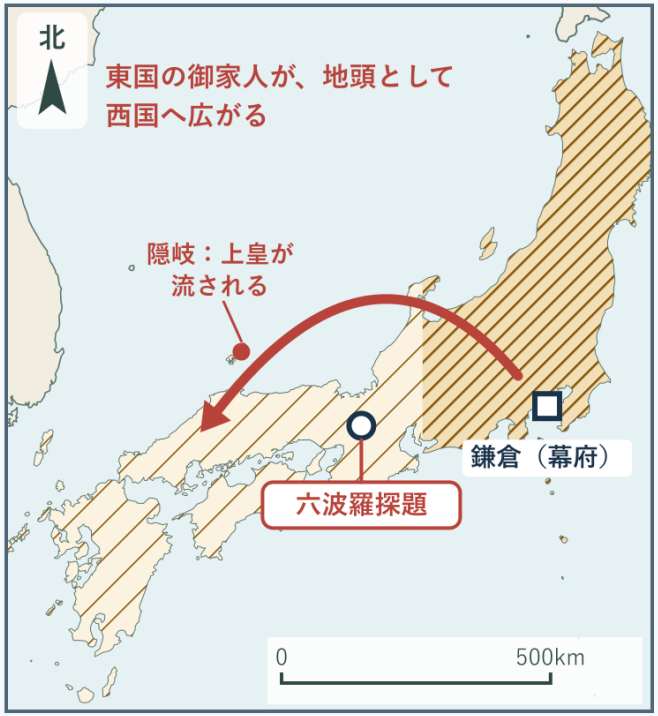
承久の乱と御成敗式目（幕府の支配の広がり）

承久の乱の後、幕府の力はどう広がり、なぜ武士の法が必要になったのか

A 承久の乱の前



B 承久の乱の後



斜線の濃さ＝幕府の力の及び方（大まかな模式）

- 濃い斜線：幕府の力が強い（東国を中心に）
- うすい斜線：幕府の力が広がる（朝廷や貴族、寺社の力も残る）
- 斜線なし：朝廷や貴族、寺社の力が強い

※ 地図は九州から東北までの範囲。斜線の範囲は模式で、実際に線で分かれていたのではない。

1 1221年 承久の乱

後鳥羽上皇が幕府をたおそうと兵を挙げる。
幕府方が勝ち、上皇は隠岐へ流される。

2 西国へ支配が広がる

京都に六波羅探題を置き、朝廷を見張る。
上皇方の土地に、東国の御家人を地頭に置く。

3 土地をめぐる争いが増える

地頭と荘園の領主（公家や寺社）が、
年貢などをめぐって争う。

4 1232年 御成敗式目

執権の北条泰時が定めた、
武士の社会の裁判の基準。

内容の例
地頭は、荘園の年貢を
勝手に自分のものにしてはならない